優秀賞（岩手県知事賞）

大切な水

花巻市立花巻北中学校
三年　及川（おいかわ）　麻菜（まな）

水は、いつもあたりまえに身近にあるものだと思っていました。

友達と遊びに行くときでも、自動販売機に水は売ってあります。学校や公園でも蛇口をひねれば水は使うことができます。お風呂もトイレも、温泉、駅などでもいつでも使用できます。水は、あたりまえの存在だと勝手に思い込んでいました。

それは、幼稚園の年長の経験によるものでした。小学校の入学式も近い、三月十一日のことでした。私は生まれて初めて大きな地震を経験しました。私が住んでいたところは震源と少し離れた岩手だったため大きく揺れましたが、水道が止まる程の大事はおこりませんでした。だから私は、食べ物やガソリンはまったく売っていなくて大変でしたが、水は地震がきても、大丈夫だと思っていました。そう思い込んでしまうほど私にとって水は身近なものでした。

私も大きくなり、小学校六年生になった頃には、熊本地震がおこりました。水道は止まりませんでしたが、電気等が少しずつ回復し、テレビを見ると、震源である熊本では、水道が出ず、生活に困っている様子が伝わってきました。その時に今まで普通だと思ってきた蛇口をひねれば水が出ることは、あたりまえではないと気づかされました。ほとんどの家庭では、水道が出ないため、多くの人が水を求め、買って歩く姿が印象的でした。

私が経験した二つの震災を通して学んだことは、生活にどれだけ水が大切か、水はあたりまえの存在ではないということです。それから私はどのように工夫をすれば、水を大切にできるのか、考えるようになりました。そして、皿洗いのときに実行し始めました。油を、そのまま流すと、流された油と混じった水をきれいにするために何倍もの水が必要となるという話を聞

きました。だからまず、お皿の油をしっかり、ティッシュでふくことを、こころがけるようになりました。それから、洗剤を洗い流すときは、おけに水をためてから、洗うようにしています。その他にもお風呂で使う水の量を少し減らし、シャワーは、必要以外の時には出さないで、出す時のシャワーの強さも弱くして水の節水に努めています。初めのうちは苦になることが多く、大変でしたが、続けていくうちに、自分は良いことをしているのだという実感や満足感が得られました。私は、まだ中学生。たくさんの大人の方に比べれば、大きな影響力はありません。しかし、このような水の作文コンクールなどをきっかけに水について考える機会が多い中学生。そんな私達だからこそできることも少なくはないと考えています。私達や私達の周りから水を大切にする活動を行っていけば、どんなに小さなことでも、いずれは、大人の方のように大きな力や原動力になると信じています。技術的にも進んでいる日本がリードして、水源保持に努めていけば、きっと新しい世の中に生まれ変わっていくことでしょう。これからの生活では、あたりまえのように節水を行えるよう、心がけていきたいです。

優秀賞（岩手県知事賞）

水と共に生きる

陸前高田市立高田第一中学校
二年　小野寺（おのでら）　麻緒（まお）

あの日、私は初めて水の怖さを知った。東日本大震災が起きたのは、今から八年前。当時、私は五歳だったが、その時のことは、今でも鮮やかに覚えている。

私はあの時、中学校の体育館に避難した。避難所で一番先に配られたのは紙コップ半分の水。ほんのわずかな量であったが、嬉しかった。しかし、水は不足し、トイレの水は流れず、お風呂に入ることなんて考えられない日々であった。私は、「海なんて無くなればいい、津波なんて来なければよかったのに」と何度も思った。地震は、私たちの大切な街を、人々の笑顔を、そして、たくさんの思い出を奪っていった。私は幼いながらも本当の悲しみを感じた。

数日して私たち家族は、山沿いにある祖父母の家に避難した。そこで、私は陽の光を集めてキラキラ光る沢の水にはっとして思わず息をのんだ。私はいてもたってもいられず、一目散に走って行き、水をすくうと一気に飲んだ。ゴクゴクと音を立て、冷たい水は私の喉を流れていった。味のしない水がこんなにもおいしいなんて思ってもみないことだった。

小学生になると、私は体育の授業が不安だった。水が怖くて、プールに入るのがとても嫌だったのだ。「おぼれたらどうしよう、沈んでしまったらどうしよう。」といつも考えてしまうのだった。けれども、プールの水面に映る輝きは、あの山の沢のきらめきにも似ていて、喉の渇きをうるおした水の記憶と重なり、私の恐怖心は徐々に薄れていった。

海が嫌いで、海なんかなくなればいいと思っていた私だったが、中学生になると次第に私の気持ちは変化し、「この海とともに生きていくためにはどうしていったらいいのだろう」と考え始めていたのだった。そんな時、父から「防災についてもっと知りたくないか」

と誘われ、市で行われている『防災マイスター養成講座』に父と姉との三人で通うことになった。たくさんの大人に交じって話を聞くことは少し難しかったが、洪水や土砂崩れなど水害の学習や避難生活の食事、地域での避難訓練の大切さなどを改めて学ぶことができた。十二講座の中でも特に、靴の代わりに新聞紙でスリッパを作ることや火を使わずに水だけで調理ができる食品のことがとても印象に残った。災害から身を守るための知識がないと、自分を守れないことも初めて知った。最後にテストを終えて、私はマイスターの認定を受けることができた。そして、その学びを同じ学年の仲間の前で発表する機会に恵まれ、避難所運営に役立つ情報を伝えることもできた。災害時に長持ちする食品や賞味期限の優先順位をつけるというローリングストックの話をみんなはとても興味深く聞いてくれて、私もみんなの役に立てたことがとても嬉しかった。

人間の命を支える水は、時として、人の命も奪ってしまう怖いものにもなる。しかし、震災を経験した私たちにとって水はかけがえのない大切なものだ。

私は、水に囲まれたこの街が好きだ。好きだからこそ、海を怖がらず、水を怖がらず、次の世代にもこの街を好きになってほしいと願う。どんなに月日が過ぎても震災の悲しさや辛さは決して消えることはないけれど、私はこの街の復興を思い、これからの人達に防災活動を通して、水の怖さも豊かさも同時に伝えていきたい。そして、あのコップ一杯の水を差し出せる人になりたい。

キラキラとした故郷の水の美しさ。水を守り、街を守っていくことがこれからの私のできることだと思う。

優秀賞（岩手県知事賞）

あたりまえと水

花巻市立花巻北中学校
二年　小山（おやま）　優芽（ゆめ）

私は今まで水について真剣に考えた事はほとんどありません。それはなぜかというと、ふだんの生活で水はあたりまえに使うことができて、今まで何の苦労もなく、いくらでも使いたい放題してきたからです。ふだんの生活で水は、飲み水、料理や洗たく、お風呂やトイレなど、考えてみるといろいろな事に使っています。私は祖父母からの話を聞き、あたりまえだと思っていた水が、実はあたりまえではないのかもしれないという考えを持ちました。

二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災。当時私は五才でした。当時の記憶はあまりありません。花巻では水道が止まることはなかったとのちに聞きました。宮城の祖父母に当時の話を聞きました。祖父母の住んでいる気仙沼の家はかろうじて津波の被害はまぬがれましたが、一週間以上水が出なかったそうです。本当に大変だったそうです。自衛隊が用意してくれた給水車に、何度も何度も並び、ペットボトルやタンクに水をくんで運び、もらった水を飲むこと、料理や、米を炊くことに使うのが精いっぱいだったそうです。限りある水の使い方に頭を悩ませて、節水を心がけ大事に使ったそうです。また、朝に顔を洗ったり、歯みがきする、お風呂に入る、食器を洗うなどの日常であたりまえにやっていることができなくなってしまったそうです。祖父母は、水がない生活は本当に不便だと実感したそうです。

もしも今、急に水が止まってしまったら、本当に困ってしまいます。水を飲むこと、料理や洗たく、お風呂やトイレなど、たくさんのあたりまえのことができなくなってしまいます。そう考えると、水は私たちにとって大切なものであり、なくてはならないものだと思います。そしてその水は自然災害などによって使え

なくなる可能性が十分にあることを考えさせられました。

では、私たちのあたりまえにある水は、どのようにして安心して使える水になっているのでしょうか。そう思った時、私は小学校のころ見学に行ったダムや浄水場を思いだしました。ダムでは雨水や川の水が貯められていて、必要に応じて量を調節して川に流しています。ダムの水は浄水場でろ過されて、きれいで安全な水になります。ろ過される時にたくさんの薬を使っていたことや、ろ過される前と後の水に大きなちがいがあったこと、安全な水か確かめるために魚を飼って泳がせていたことをよく覚えています。

テレビで、水道からきれいで安全な水がでてくるのは日本だけだというのを聞いたことがあります。外国では、水道から茶色い水が出てくる所もあり、また、水道の設備すら整っていない国もあるそうです。比べると日本はとてもめぐまれているのだと思いました。そして日本できれいな水が出るのはいろんな知恵や技術のおかげなのだなと思い、安心して水が使えるのがありがたいことだと思いました。

水は私たちにとって、安全であたりまえのものかもしれません。でも、水は限りなくあるものではないのです。夏になると雨も降らずダムの水がひからびて減り、給水制限されることもあります。水は資源なのです。あたりまえでいつも使う水だからこそ、水を出しっぱなしにしない、無駄使いしないなどの節水を心がけて、これからは、水を大事に使うようにしたいです。

実際に、ここ数日、節水を心がけて生活してみました。お風呂でシャワーをこまめに止めたり、余った水を何かに再利用できないか考えたりしました。それは、無理することなく、自然と考えたり、行動したりできたので、これからも生活の中で気持ちよく続けられると思います。

優秀賞（岩手県知事賞）

命をつなぐ大切な水

一戸町立奥中山中学校
二年　中嶌（なかしま）　歩（あゆみ）

「どうぞ召し上がって下さい。」そうささやいて、コップ一杯の水を今日も供えます。

手術や入退院を繰り返していた母方の祖父が他界して四年。入院をする度に「家の井戸水が飲みたい」と言っていましたが、亡くなる十日程前から誤えん性肺炎を防ぐために、少しの水も自由に飲むことができませんでした。時折ベッドサイドの棚に置かれた愛用のマグカップをさびしそうに見つめる祖父の姿を忘れることができません。祖父が八十年余り飲み続けた井戸の水は、今も変わりなくおいしく飲むことができます。

私たち人間の体の約六割は水分です。年齢や性別にわずかな差こそありますが、一日に約二・五リットルの水分を排出し、同量を食事や飲料水から摂取して命をつないでいます。生きていくうえで最も身近な栄養素とも言えるでしょう。

私たちは、その「水」を大切なものとして意識しているでしょうか。今日、口にした水は安全なものだったかと、考えるでしょうか。蛇口をひねるといつでも水が出る生活をしていると、水のありがたみも安全かさえもほとんど気にしないと思います。安全でおいしい水を使って野菜を洗い、調理し食卓に並べられたものを、私たちは日々いただいています。その日常は当たり前のようですが、自然災害等で不自由な生活をしてみて初めて、安全な水が飲めることはとてもぜいたくなことだと気づきます。私は、大きな災害にあったことはありませんが、井戸水なので停電になると水が使えない不便は何度も経験して知っています。自然災害が起こり、避難している人たちの姿をニュースで見る度、祖父のことが頭に浮かび、安全な水、おいしい水について考えるようになりました。

水に関心を持つようになって初めて知ったことがあ

ります。母はパン生地をこねる時、水道の水を使わずミネラルウォーターを使っていました。また、毎朝作る味噌汁に使う水は一度煮沸した水を使っていました。水が無色であっても無味ではないことを発見しました。土壌や気候の違いもあり、水の味は地域ごとに大きな差があることも知りました。母は、「修学旅行先で水道の水を飲むことができなかった」と今でも話します。結婚前に東京で洋菓子店を営んでいた母は、関東に出て初めて「水は買って飲む物」「買った水を使ってお菓子は作るもの」だと感じたそうです。食べ物の味や素材を生かすのも水の大きな力だと思いました。

私たちの生活や体に欠くことのできない水。大切な資源であり栄養素でもあります。その水が、安全な水であり続けるように、山や川、海、空気を汚さず大切に守り続けることが何よりも大切です。道端に捨てられた吸殻や空き缶などのゴミ。生活排水などにより汚れた川。土も川や海の水もやがて私たちの体の中に入るのだと考えると、たとえ浄化されたとしても気持ちの良いものではありません。自分の周りの自然環境に関心を持ち、最初から汚さないように心掛け、きれいな環境を守り水質の向上を図っていくことが私達中学生にもできることなのだと思います。

祖父の入院中、家族の誰もが「家の水を飲ませてあげたい」と思っていました。祖父が小さかった頃から何十年も変わることなく命をつないできた「家の水」はこれからも家族の命をつないでいきます。また、この水がやがて地下で川とつながり海へと流れていくまでに、たくさんの動物や植物の命をつなぐことにもなるでしょう。

「どうぞ召し上がって下さい。」たとえそのコップ一杯の水が、空になることがなくても尊い水への感謝の心を忘れず供え続けようと思います。祖父がおいしそうに飲み干した笑顔を思い出しながら。この先もずっと。

佳作（岩手県知事賞）

水と人とのつながり

盛岡市立渋民中学校
二年　岩崎（いわさき）　志保（しほ）

私が暮らしている地域「生出」の名前の由来は「生まれる水」という意味で、水は私達にとっても、生出にとっても非常に大切な存在です。そんな生出には、川や湧口、水にまつわる伝説があります。

一つ目は、滝ノ沢神社についてです。この神社には、生出の水に関する伝説があります。「平安時代に東北地方をおさめていた安倍貞任という武士が滝ノ沢神社で、弓矢がささってけがをした目を洗うと目が治った」という不思議な伝説です。このような伝説ができるくらいこの地域には水がきれいだというイメージがあるんだなと思いました。

二つ目は、湧口についてです。生出にはたくさんの湧口があります。それらの湧き水は岩手山から百年かけて湧き出てくる水なので水質はとてもきれいです。その中でも、小生湧口は水温が一年間変わらないという特徴を持っています。この特徴を生かしてニジマスの養殖をしている人もいます。また、とてもきれいなので水を飲むこともできます。

このように「生出」は、きれいな水が豊富です。だから私達は生出の水を色々な事に利用したり、他の地域の人に紹介したりして、良さを広めています。

水はとても身近な存在であるとともに、私達が生きていくのに必要なかけがえのないものだと思います。しかし、その大切な水が身近にあることで人間が汚してしまったり、無駄にしてしまうことがあります。

例えば、近くの川にゴミを捨てたり、生活排水を流したりすることで水は簡単に汚れてしまいます。元々の水質がきれいでも、人間の行為によってどんどん汚くなってしまいます。そうなると、人間に害がなくても野生の動物や植物が生息しにくくなってしまうと思います。そうならないためには、ゴミをしっかりゴミ

箱に捨てる、あるいは清掃活動を行うなど、人間が努力することが大切なのだと思いました。また、水は限りある資源です。私はＣＭで、水をくみに行くために学校に通うことができない少女のことを知りました。日本人は、いつでも水を買ったりくんだりすることができますが、世界には子どもが水をくみに行くことが当たり前とされている国もまだまだ多いと思います。だから、毎日普通に水を飲むことができる私達は水の恵みに感謝して、なるべく水を無駄にしないようにしなければならないと思いました。

私は、水について考えてみて思ったことは、やはり水は人間が生きていくために絶対に必要なものだということです。そして、土地も人間も豊かにしてくれるものであることを改めて感じました。しかし、人と水が身近にあるがゆえに必要性が薄れたり、自分達が生活排水を流して無意識に自然を汚してしまうことが多いのも問題です。だからこそ、人間が汚してしまった水を自らきれいにしていくことが自然を保っていくことに一番必要なことだと思います。そして水をきれいにすることによって、たくさんの命を救うことにつながっていくのです。

佳作（岩手県知事賞）

有限の資源「水」

花巻市立花巻北中学校
三年　佐々木（ささき）　芽依（めい）

「はい、じゃあ終了。」

先生の声を合図に、練習を終えた生徒達は一斉に水道へと向かっていく。今日は暑かった、疲れたなどと話しながら、渇いた喉を潤す。このような、喉がカラカラに渇いているときに飲む水は、やはりおいしいものだ。水は、私達の生活において必要不可欠である。しかし、蛇口をひねると水が出てくることは、決して当たり前ではないのだ。

八年前に起こった、東日本大震災。多くの人々が犠牲になったと同時に、多くの人が避難所での生活を余儀なくされた。地震の影響によって水道も止まった。陸前高田市の米崎小学校体育館には、二百人を超える人々が避難していた。震災翌日、断水しているためにそのままではトイレの使用ができず、バケツに川の水を汲んでトイレを使用した。一方、飲食に使う水を川から汲むわけにはいかない。そこで、車で五分程の場所にあった湧き水を汲むことができるところから、水を運んでくることにした。容器には畑で使用する五百リットルのタンクを使い、毎日交代で朝と晩に水汲みをした。お風呂に入れるようになったのは、それから実に一週間後のことだった。

どうだろうか。あの日、たった一瞬の出来事で、今までの生活の「当たり前」が全て奪われることになったのだ。他の避難所も同様に水不足に悩まされ、中にはプールの水や雨水を活用したというケースもあった。今、安全な家に住んでいる私は、蛇口をひねる軽い力で水を手に入れることができる。しかし、震災直後の避難所では、重いタンクを持ち、長い道のりを歩いて何百人分もの水を運んでこなければならなかった。

便利になった現代では忘れてしまうが、水はとても大切で欠かすことのできないものなのである。

では、それを踏まえて、私達はこれから水をどのように使っていくべきなのだろうか。

まず一つは、使用する量を減らす「節水」に取り組むことだ。例えば、水を流しっぱなしにしない、汚れのひどい食器は紙でふきとってから洗うなどだ。無駄に使われる水の量を少しでも減らせるよう、個人が意識的に取り組んでほしい。

二つ目は、汚れた水の流す量を減らすことだ。食器洗いの洗剤や油をそのまま流してしまうと、浄水場できれいにするために大量の水を使うことになってしまうのだ。それを防ぐために、洗剤は使う量だけ使う、調理後の油は軽くふきとるなどの対策をしたほうが良い。

普段は何気なく使っている、水。蛇口をひねればいくらでも出てきそうに思えてしまうが、実はそうではない。水も地球にある有限の資源なのである。そのことをきちんと胸に刻んで、水を大切に使っていきたい。

佳作（岩手県知事賞）

今、この瞬間を生きる

盛岡市立繋中学校
三年　髙橋（たかはし）　愛茉（えま）

もし、今日本に水が一リットルしかないとしよう。その水は一リットルで百万円する。そんな時、あなたはその水を買いますか。

水について深く考えるきっかけとなった出来事は昨年の七月に起こりました。盛岡市代表として台湾に渡航した私は日本とは異なる環境や気温により体調を崩してしまいました。そのため三日間、何も口にせず水だけを飲んでいました。その時私が三日間で消費した水は、三リットルでした。簡単に言えば一日で一リットル消費している事になります。私はその三リットルがなければ脱水症状もしくは死に至る可能性もありました。その時私は改めて水の大切さを感じました。

また、台湾では水道水をのむことが原則禁止されていました。それは水が浄水されていないからです。今、日本のほとんどの地域では水道水を飲んでも大丈夫な時代になりました。それでも、日本ではペットボトルを買う人が増えています。そのペットボトルの飲み残しは捨てられてしまいます。つまり、私達は必要以上に水を消費していることが分かります。そんな中、アメリカではペットボトルの水を買うのではなく水道水を水筒に入れて持ち運ぶという事を進めているそうです。必要な分だけを入れて持ち運ぶので飲み残しが減り、ペットボトルを捨てないので環境にもいいそうです。

一番怖いのは水がなくなる事です。私たちは生まれた時から水があるのが当たり前という生活を送っています。でも、水は無限にあるわけではありません。私たちが使える水の量は一秒、一分で少しずつ減っています。だからこそ大切に使う必要があります。

水がこの世からなくなると、私たちは海水を飲んでいく生活になるかもしれません。海水をきれいにして

飲む……。それは生きるために必要です。そんな事が起こらないように水について深く考える事が大切です。

私は今回、台湾に渡航し水だけを飲む生活を体験する事で初めて水とのかかわりについて深く考えました。いつもあるのが当たり前な水、と考えているからこそ海外の水に関する状況を見て感じるという事が大切だと分かりました。

今を生きる私たちに必要なのは未来の事まで考えることです。

「水なんてなくなるはずがない。」

「台湾と日本……。国が違うから環境も違っていて当たり前……。」

「未来の事は未来で解決する」

そんな理由で私も節水を懸命にする、という事はありませんでした。でも、世界がこんなにも行動しているなら私たちも心がける必要があります。日本の未来を繋ぐ私たちにできる事。それは「考える、行動する」の二つです。災害で水の恐ろしさを感じ、支援で水がある事の大切さを学び……。いろいろな場面で水と関わってきた今の私だから、言えます。

全てを繋ぐかけ橋……。それは水です。未来の事を考え、救える人になりたいです。一リットルの水が百万円で売られる日がこないように。今この瞬間を生きる私たちにできる事は新しい場所で新しい発見をすることで、当たり前が当たり前でないという有り難さに気付くことです。

佳作（岩手県知事賞）

水と向き合って生きる

洋野町立宿戸中学校
二年　馬場（ばば）　仁美（ひとみ）

「いらっしゃいませ。」「新鮮なおいしいウニはいかがですか。」

五月三日、洋野町宿戸漁港で「ウニ直売会」が行われました。この行事は毎年行われていて、宿戸中学校の生徒はボランティアとして販売の手伝いや海産物の運搬、駐車場係等の仕事を地元の高校生の人たちと一緒に行っています。私も昨年から参加しています。県内はもちろん県外、遠くは埼玉県などから多くの人たちが来てくださいました。海でとれた新鮮なウニやホヤ、これらがこんなにたくさんの人を引き付け集めてくれる、そういう海からの恵みの偉大さに気づかされました。

私たち宿戸中学校の生徒は、小学校一年生から「総合的な学習の時間」等で、「海洋」についての学習をしています。小学校二年生では、稚ウニの放流、四年生では、地震と津波に関する学習、五年生になると二年生の時に放流したウニを採って殻をむく体験等を行います。殻をむいたときに、ウニの身がぎっしり詰まっている様子を見ると、二年生のときの稚ウニの放流を思い出してうれしくなりました。

中学校に入学すると、一年生では三日間かけて行う塩ウニ作り。二年生は新巻き鮭、鮭とば作り。三年生は、修学旅行初日、東京の「いわて銀河プラザ」で自分たちが作った製品を販売しています。

私が一番印象に残っている活動は、四～六年生が参加できる「ウニの森植樹祭」というイベントです。八木地区山林の奥にあるあいた土地に広葉樹を植える活動です。私たちが植えた木がやがて大きくなり、葉っぱが落ち、腐葉土となります。その山の栄養分を豊富に含んだ水が川となり、海へ流れ込み海の生き物たちを育てているということを学びました。これらが繰り

返されることで豊かな山と海が作られ、そこで暮らす私たちの生活が支えられているということを知り、私たちの目に見えない所で、自然の営みが行われていることがすごいと思いました。

しかし、海や水は私たちに恵みをもたらしてくれるだけではありません。二〇一一年三月十一日に起きた忘れもしない東日本大震災。当時私は六歳でした。あの時私はまだ幼く、何があったかほとんど覚えていません。でも、当時の映像が流れると母が、

「あの時は本当にすごかったのよ。黒い波が押し寄せてきて本当に怖かったんだから。」と必ずといっていいほど話してくれます。それを聞くと、あの震災が本当に恐ろしいもので、私が今こうして安心して生活していられるのは、たくさんの人の努力のおかげなのだと思います。と、同時に水は自然のものであるということを強く感じずにはいられません。同じようなことが二度と起きてほしくないとどんなに強く願っても、水は自然のものであり、私たち人間が操ることのできないものなのです。

私たちは水から得られる恵みと水によってもたらされる災害とともに生活していることが分かります。どちらかに偏ってはいけません。いや、偏らないようにできているのかもしれません。

いつかまた困難な状況がやってくるかもしれません。でも何が起こるか分からない未来に脅えているのではなく、水と向き合い生きていくことが大切だと私は思います。宿戸には海産物の養殖、増殖溝の造成や震災等を地域で力を合わせ乗り越えた歴史があります。水からもたらされる恵みに感謝し、さらに地元の産業を発展させていくため私たちができることを地域の一員として努力することや、災害を減らすために私たちができる活動を考え取り組んでいくことが宿戸の海を守ることにつながるのだと思います。

佳作（岩手県知事賞）

水の大切さ

花巻市立花巻北中学校
二年　古舘（ふるだて）　春乃（はるの）

私は四年生の時、何気なく新聞を開いてみた。そこにあったのは、ちょうど私と同じくらいの外国人の子達の笑顔だった。今まで、水道がなかった学校に水道が出来たという記事だった。驚いた。日本では当たり前なのに水道から出た水にとても喜んでいる。私は、初めて水の大切さ、水道の水のすばらしさを知った。

その後、浄水場の見学に行った。水道からきれいな安全な水が出る、そしてその水を飲むことが出来るのは、消毒しているからだと初めて知った。外国では、日本人が水道水を飲むことに驚くと聞いたことがある。水道水を飲めるのは、浄水場の人達の努力があってこそだ。その水は、とても大切なものだと感じた。

しかし、こんなに恵まれているのに、私達は水を大切にしているだろうか。学校や家、お店などの水道の水を出しっぱなしにしている人が多い。水だって限りがある。水がなくなったら、どうなるだろう。トイレやおふろに、食器洗いや洗たく、料理…。数え切れないほど、私達は水を使っている。その中でも重要なのは水分補給だ。人間の体の水分は半分以上。水分が少なくなると、体調不良になってしまう。私達の体にとって水はとても重要なものなのだ。

でも、どうしたら水がなくならないのだろう。私達がすぐ実行できるのは、「節水」だ。出しっぱなしはやめる。これなら一人ひとりが気をつければできることだと思う。手を洗う時、歯みがきをする時、食器洗いの時、シャワーを浴びる時、「少しぐらいなら…」と思って出しっぱなしにせず、環境のことを考えていけば、少しでも水不足はなくなるのではないか。

私が五年生の時に読んだ本には、こんなことが書かれていた。「森は緑のダム」その時は意味がよく分からなかった。ダムは水を貯めるものだ。でも読みすすめ

ると、森は水をあげて育ち、森にしみこんだ雨水は、きれいな地下水になるということが分かった。だから、森は「緑のダム」なのだ。水をなくさないためには、森をなくさないことも大切だ。

毎日、当たり前のように使っている水。水道から、きれいな水がいつも出てくる。そのことは、とても幸せなことなのだ。世界では水道がない国がある。遠い川まで水をくみに行くため、学校に行けない、私達と同じくらいの歳の人もいる。あの新聞にのっていたように、水道ができて喜んでいる人もいる。私達は水がないということがないから、ピンとこないかもしれないが、他の国の人達は、水をとても大切にしているのだろう。そんな人達が、日本人が水を出しっぱなしにしているのを見たら、どんな気持ちになるだろう。

私達の体を支えている「水」。水があるから生活できる。水があるから生きていける。水を大切に、水に感謝の気持ちを示すこと。これが、水に恵まれている私達にできることではないだろうか。